

移住者家族と墓に関する一考察

— 沖縄県本島中南部への移住者の事例から —

早坂優子

はじめに

1. 墓の所有形態の変化とその分布
 2. 都市部の移住者の墓
 3. 故郷の共同墓
- おわりに

はじめに

現在、那覇市・沖縄市を中心とする本島中南部では、墓地の増加が著しく、ここ十数年で行政による墓地整理の動きも活発になった。この地域は、戦後に本島北部や宮古・八重山諸島から、職を求めて多くの人が流入した地域であり、本島中南部の墓の増加は、この移住者の存在が少なからず影響を与えている。

このような中南部への移住者家族と墓に関しては、孝本頁が一八九〇年代に調査を行っている。孝本は、本島北部の饒波部落から、那覇市を中心とする都市部へと移住した家族が、都市部に新たに墓を建てる事例を報告している。移住者は、故郷の村墓から都市部の新たな兄弟墓へと所有形態を変更し、墓を建てている。孝本はこの現象を、移住による故郷との絆の弱まり

が原因で、墓の新築や遺骨の移動が行われたとした。また、孝本は墓が増加する都市部の様子にも若干触れており、移住者と墓の増加の関係を示唆している「孝本 二〇〇一…一九九〇二一八」。

近年では、越智郁乃が宮古・八重山諸島から沖縄本島へと遺骨を移してきた家族に注目し、「墓の移動」⁽¹⁾についての報告を行っている。沖縄における離島という地理的条件は、生活拠点の移動と「墓の移動」に密接に関係していることが指摘された「越智 二〇〇八」。

ここまでの研究で、故郷との繋がりの希薄化や、離島という地理的条件が、移住先に新たな墓を建てる要因になることが明らかにされてきた。本稿では、以上の研究を踏まえつつ、現代沖縄の都市部における家族墓の増加とその背景について、本島中南部に家族墓を持つ移住者家族を事例に、家族内の故郷感の相違という点に主眼を置いてみていきたい。

一章では、移住者の故郷における墓の利用のされ方を押さえるために、墓の利用の現状を所有形態を中心にまとめる。これによって、その移住者家族にとって、都市部に新たに墓を建てることなどのような意味を持



図1 沖縄県

つことなのかを把握する。

二章では、実際に移住先である都市部に墓を建てた家族の事例を挙げる。本稿では、従来の研究によって明らかにされてきた移住による故郷との絆の弱まりや、離島という地理的条件という原因に加え、家族内での故郷感の相違という点を明らかにするため、移住者本人ではなく、その家族によって墓が建てられた事例を報告する。

三章では、現在でも故郷の墓を利用し続ける移住者の事例を報告する。これにより、二章で事例を挙げた家族が、故郷との距離といった便宜上の理由以外で、故郷ではなく、現在の居住地の近くに墓を建てていることを明らかにする。

1. 墓の所有形態の変化とその分布

(1) 所有形態の変化

沖縄の墓制の特徴の一つとして、墓の所有形態の多様性を挙げることができる。その種類としては、村落の共同墓である村墓、父系出自集団である門中の共同墓である門中墓、血縁に關係なく、気の合う友人などで利用する模合墓、兄弟とその家族の共同墓である兄弟墓、墓を継いだ子どもとその家族でのみ利用する家族墓がある。これらの墓の中でも、家族墓の増加は著しく、家族墓は現代沖縄の墓の主流になりつつあると言える。また、これらの家族墓が、様々な墓の所有形態の中で占める割合の増加とともに、墓そのものの数も増加している。多くの人々が共同で利用する墓と異なり、一家族でのみ利用する家族

墓が主流になると、新たに墓を建てるが多くなる。その結果、墓の増加が加速するのである。

この墓制の変化に関連した研究の初期のものは、社会人類学からの研究で、常見純一による沖縄本島北部安波の事例であった。常見は、沖縄県北部の門中組織が首里・那覇地域の門中を模倣しながら成立していったことを明らかにし、その中で、墓の所有に対する意識の変化によって、村落の成員で共同利用する村墓から、父系出自集団である門中によって共同利用される門中墓へと墓が分離する様子を報告した〔常見 一九六五〕。

また、石垣みき子は、本島中部の家族単位で利用する家族墓が主流となっている一村落を取り上げ、村墓から徐々に家族墓へと墓が変化していることに着目した。そして、門中墓ではなく家族墓として新しく墓を建てることと、門中組織とは全く矛盾しないと見る見解を示した〔石垣 一九八一〕。

ここまでの研究をみると、村墓から門中墓へ、村墓・門中墓から家族墓へとより狭い範囲で利用するような変化が指摘されている。

(2) 墓の分布

沖縄には多様な所有形態の墓が存在し、それらの墓が、現在でも門中墓の利用が主流になっている本島南部以外では、複雑に入り組んでいる。これに関しては、名嘉真宜勝も「現在一地方の墓制をとりあげてみても、村墓や模合墓、門中墓それに家族墓があるという風に、極めて複雑な墓制を形成している」

〔名嘉真 一九七九・二二二〕と述べている。南部以外の地域では、一つの墓地の中に門中墓から家族墓まで様々な墓が存在しているが、実際に納骨のために利用する墓としては、多くの地域で家族墓が多くなっている。家族墓が主流になった地域では、村墓や門中墓は、拝みの対象として機能しており、実際に利用されていないことが多い。

全体的には家族墓化の動きが顕著であるが、村墓、門中墓といった共同墓が現在でも利用されている地域も存在する。先述のように、本島南部は門中墓を利用する地域であり、現在でも門中の成員によって墓が共同利用されている。本島南部以外では、名護市よりもさらに北の地域や離島でも村墓・門中墓・兄弟墓といった共同墓が現在でも利用されている場合がある。

本章では、墓の所有形態の変化と、現在の地域ごとの墓の利用のされ方についてまとめた。これは、本島中南部への移住者家族がどの地域の出身で、移住者の実家の墓は現在どのような利用されているかということを考える上で重要である。故郷の墓が家族墓として利用されているならば、墓を継ぐ人物でない限り、分家者は新たに墓を建てなければならない。もし、移住者自身が墓の後継者であったり、村墓・門中墓・兄弟墓のような共同墓が利用できる立場にあるならば、故郷の墓に戻るか、移住先に新たに墓を設けるかの選択を迫られることになる。

2. 都市部の移住者の墓

(1) 霊園型墓地と移住者

現在、沖縄県那覇市・沖縄市周辺といった本島中南部の都市部には、市町村・宗教法法人・公益法人が管理主体となった霊園型墓地が多く存在し、都市部の墓の増加を背景に一九九〇年代から増加が目立つようになり、現在も年々その数を増やしている。中でも宗教法法人・公益法人によって整備されたものが多く、手入れが簡単な御影石の墓、駐車場や水汲み場・トイレといった設備の良さを売りに沖縄の人々に受け入れられてきた〔早坂 二〇一三〕。

その霊園型墓地は様々な背景を持つ人々の墓の受け皿として機能しているが、中でも本島北部や宮古・八重山諸島といった離島から、本島中南部に移住してきた人々によって盛んに利用されている。筆者が話を聞いた四八家族中三一家族が移住者家族であり、全体の約六割に当たる。このすべての家族の墓が、現在は家族墓として利用されている。

(2) 調査地概況

筆者は那覇市と南風原町にある二つの霊園型墓地において調査を行った。那覇市内には、市が管理する公営墓地のほかに、複数の法人墓地⁽²⁾が存在している。その一つである石嶺霊園は、首里に古くから存在する安国寺が管理する霊園である。西原町との境に立地するこの霊園は、二七三九平方メートルの敷地に



写真1 琉球霊園

一九一基の墳墓が立ち並び、常駐の管理人によって管理されている。周辺には、那覇市の管財課が管理する公営墓地や、個人墓地と思われる墓地があり、それらの墓地群に囲まれるかたちになっている。石嶺霊園ができたのは平成一四（二〇〇二）年であり、すでに霊園型墓地が広く知られるようになっていた時期である。場所も首里の近くということもあり、販売を開始してから間もなく完売したという。霊園内には、門中でも使用できるような大きな区画もあれば、家族墓としてよく用いられるコンパクトな区画もある。墳墓の素材は御影石に限定されており、トイレ・水汲み場・駐車場が完備されている。

もう一つ、筆者が調査を行ったのは、南風原町にある琉球霊園である。面積一万七〇三七平方メートルの敷地に、七〇〇基の墳墓が設置されている。この霊園は、真言宗宝壽院が管理する霊園である。本堂周辺に墳墓が広がり、寺院の職員によって管理されている。南風原町は那覇市に隣接する行政区であり、この霊園は、首里からほど近い限りなく那覇市寄りの場所にある。この近くにも那覇市管財課が管理す

る公営墓地があり、そのほかにも、周囲には公益法人が管理する墓地や個人墓地が多く存在している。この霊園を管理している宝壽院は平成七（一九九五）年に福岡県から来た寺院で、翌年に琉球霊園ができた。この時期は霊園型墓地が急増し始めた時期であり、琉球霊園の墓も徐々に売れていき、現在はすでに完売に近い状態である。この霊園も大小様々な大きさの区画があり、御影石の墳墓が立ち並び、トイレ・水汲み場・駐車場が完備されている。

調査期間は、平成二四（二〇一二）年から平成二五（二〇一三）年夏までであり、主に墓前祭³を行うために霊園型墓地を訪れていた利用者から話を聞いた。事例で出てくる移住者の年齢は、七〇〜八〇歳代となっている。

（3）移住者家族の墓

〈事例1〉

現在A家の墓には、戦後すぐに名護市から職を求めて、浦添市に移住してきた男性一人の遺骨が納められている。この墓は、元々名護市にあった墓から遺骨を移動し、新しく建てたものである。故郷の村落は家族墓が一般的になっており、墓を継がなかった男性は、新しく墓を建てる必要があった。男性は四〇歳を目前に亡くなってしまい、生前の本人や男性の親・兄弟の希望もあって、本家の墓の近

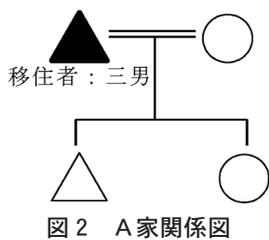


図2 A家関係図

くに簡易的な墓を建て、後に本格的な墓を建てる予定であった。しかし、男性の妻と子どもは、墓前祭の度に名護まで足を運ぶのが大変であり、自分たちの居住地の近くに墓を購入し、約三〇年が経ってから、一旦は名護市に建てた墓から遺骨を移動させることになった。

〈事例2〉

現在B家の墓には、男性一人の遺骨が納められている。この男性は名護市の出身であり、名護市で就職し、結婚をした。三人の子どもにも恵まれたが二九歳の若さで亡くなってしまった。男性はまだ若かったため、墓をどうするか迷い、とりあえず長男筋の墓の墓庭に仮墓を造って遺骨を納めた。男性の妻は、男性の死後もしばらく名護市にとどまり続けたが、実家がある那覇市に帰ってきた。そして約五〇年の年月が経った平成一五（二〇〇三）年に、墓を那覇市に移す決心をしたという。大きな理由としては、子どもたちも那覇市で暮らしており、今後のことを考えると近くに墓があったほうがいいと思った話

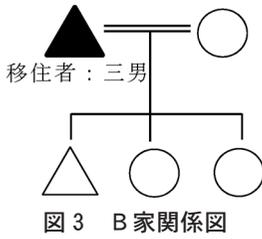


図3 B家関係図

す。また、墓行事の度に名護市まで足を運ぶのが面倒であったという。この事例は、他の事例と異なり、移住者は那覇市から名護市に嫁いだ女性である。そして、自身の移動に伴って北部にあった墓を移動させ、新しい墓を建てるという結果に至っている。

〈事例3〉

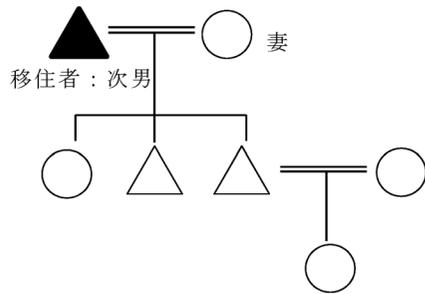


図4 C家関係図

現在C家の墓には、戦後に座間味島から移動してきた男性の遺骨が納まっている。この墓を購入したのは平成九（一九九七）年だが、男性が亡くなったのはそれよりさらに一〇年ほど前である。その間、寺院の納骨堂に預けていたが、男性の母親が「もう少しで自分は死んで墓に入るのに、息子の骨がまだ墓に入っていないのが気にかかる」と男性の妻に言ってきたので、墓を新しく建てることにしたという。男性の実家の墓は、現在でも兄弟墓として利用されている墓であり、以前から男性の母親は男性の妻に、男性の遺骨を座間味の墓に入れるようにと催促を続けてきた。妻は、座間味島の墓にあまり行ったことがなく、馴染みもない遠い墓に夫の遺骨を持っていかれても困るという思いであった。そこで新たに本島に墓を建て、今は落ち着いているという。

以上三家族の事例を紹介した。この三家族に共通することとして、新しい墓をどこに建てるかの判断が、故郷との繋がりが一番強い男性ではなく、その妻や子どもによって行われているということが挙げられる。A家の場合、若くして亡くなった男

性やその家族、親戚は、男性の故郷である名護市に墓を新設することを望んでいた。男性の妻は、一旦はその希望の通りに名護市に墓を建て、墓前祭の度に足を運んでいた。しかし、自分も高齢になって今後のことを考え、亡くなった男性の意思には反するが、名護市から墓を移すことになった。男性の実家の墓は家族墓であるため、他の共同墓と比べると「墓の移動」は行いやすかったと考える。

B家の場合も、同じく名護市からの「墓の移動」である。しかし、この場合他と異なるのが、移住者は男性ではなく、その妻であることである。夫の死後、実家がある那覇市へと移住し、その後は名護市の墓へと通っていたが、結果的に墓を移すことになった。男性の実家の墓は家族墓であるため、比較的容易に「墓の移動」は行えたと考えられる。

最後のC家は、本島周辺離島である座間味島からの移住者家族による墓の新設である。亡くなった男性の故郷は座間味島であるが、男性の妻は本島の出身である。座間味島の墓は兄弟墓として利用されているため、C家は新たに墓を建てなくても、座間味島の墓を今後も利用することが可能であった。息子の遺骨がきちんとした墓ではなく、寺院の納骨堂に安置されていたことにも不満があったが、他の兄弟たちと同じように、兄弟墓を利用してほしいという願いもあったようである。男性の妻は、墓前祭などで、座間味島の夫の実家の墓に行く機会が少なかった。夫の遺骨を座間味島の墓に入れてしまうと、その後もその墓を利用し続けなければならない可能性も出てくる。それ

らも考慮した結果、本島に新しい墓を建てるという結果になった。C家の場合、先の二例と異なるのが、男性の実家の墓は兄弟墓であるということである。座間味島に残った兄弟たちは、この墓を利用していため、C家もし座間味島に残っていたければ同じように兄弟墓を利用する流れになっていたかもしれない。しかし、島から離れたことによって、家族墓を新設することが容易になったと考えられる。

これらの事例のうち、C家以外の二つの家族は、夫の実家の墓が家族墓として利用されている。この場合、墓がどこにあるかという問題だけで、誰と一緒に利用するかという問題は存在しない。そのため、夫やその家族、親戚が故郷という土地に特別の思い入れがない限り、「墓の移動」は行いやすい。一方、C家の場合、夫の実家の墓は兄弟墓であるため、どこに墓を建てるかという問題の他に、誰と一緒に利用するべきかという問題が生じている。夫の実家の墓が共同墓であった場合、必ずしも墓を新設する必要はないが、移住者の妻がその選択を迫られた場合、共同墓から分離して、新たに家族墓を建てる 경우가多い可能性が考えられる。この点について、次章では、移住先である都市部ではなく、移住元になっている一村落を事例にみていきたい。

3. 故郷の共同墓

(1) 調査地概要

伊地地区は西海岸に位置し、南は宇良地区、北は与那地区に

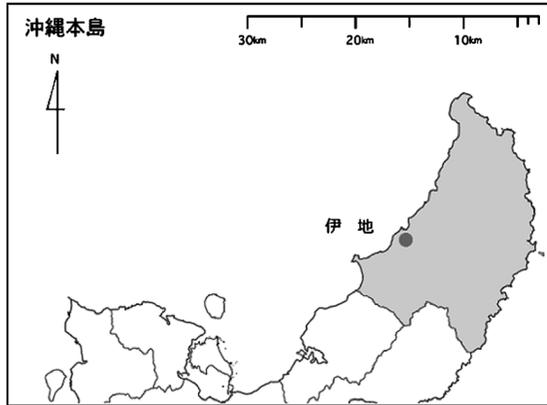


図5 伊地地区の位置

隣接した地区である。伊地川の下流に集落が形成されており、平成二七（二〇一五）年六月時点で行政が把握している人口は二〇一人であり、世帯数は八四世帯となっている。寄留民が多いことが特徴として挙げられ、字誌によると二五の姓が存在するとされている「字伊地編集委員会 二〇一〇 一四六―一四八」。

親族組織としては、いくつかの門中があるとされているが、その数は曖昧である。字誌には同じ姓を持つものを一つの門中として、二五の門中が挙げられているが、実態は門中と呼ぶには難しいものがほとんどである。しかし、何代にも渡って伊地に住み続け、祭祀を行う神役を輩出してきた門中も存在する。

代表的なものとして
は、ニガミ（根神）を出して
いた新里門中が挙げられ、新里門中が伊地の村建ての門中であるとされている。現在最も大きい門中は島門中であり、門中の男性によると、村落の外で生活している世帯も含めて三二世帯で構成されているという。

伊地の墓地は、隣接

する宇良地区と共同で利用されている。かつては村墓や籠も共同で利用していたという。伊地の墓地には現在使われていない村墓の他に、門中墓とされている墓や家族墓など異なる所有形態の墓が存在している。墓地の中で最も古い墓は村墓であり、門中墓は明治三九（一九〇六）年に宇良地区の大城門中が建てたものが最初とされている。伊地で最も古い門中墓は島門中のものであり、大城門中の墓ができて間もなく建てられたと伝えられている。このように門中墓を持つ人々は門中墓を利用し、それ以外は村墓を利用してきた。家族墓が建てられるようになったのは昭和五〇（一九七五）年前後からであり、村墓が満杯で使えなくなってきたからであるとされている。家族墓を建てた人の中には、村墓の中から個人の特定が可能な親族の遺骨を新しい家族墓に移動させる人もおり、遠い先祖は村墓に入っているという説明がなされる。現在伊地の墓地には約四五基の墓が存在している。「〇〇家之墓」と表記されているものと屋号が表記されているものがほとんどであり、「〇〇門中」と表記されているものはあまりない。しかし、「〇〇家之墓」と表記されている墓でも、門中墓として利用しているとされるものもあり、現在の伊地の墓地で正確に何基の門中墓、家族墓があるかを把握することはできていない。

(2) 伊地の門中墓と移住者

〈仲嶺門中の場合〉

仲嶺門中は首里から来た門中であり、明治以前にはすでに伊

地に移り住んでいたとされている「宇伊地編集委員会 二〇一〇 一四七」。門中の成員は村落の外で生活をしている世帯も含め、現在約二〇世帯であり、この成員によって墓が共同利用されている。墓そのものがいつ作られたかは不明であるが昭和四六（一九七二）年に改修が行われている。昭和一四（一九三九）年生まれの話者が幼少のときにはすでに門中墓として利用していたことから考えると、少なくとも七〇年以上前にはあったことになる。

仲嶺門中の成員の中にも戦後に都市部へと移住していった人が何人かおり、墓を都市部に新しく建てた人もいれば、この門中墓を利用する人もいるという。話者である男性は三男であり、昭和三〇（一九五五）年に仕事を求めて那覇市に移住してそこで所帯を持った。那覇市に出て約六〇年になるが、故郷の墓に対する思い入れが強く、タナバタ（七夕）の墓掃除の日には、同じく那覇市に住む弟と一緒に墓掃除に訪れる。この男性もいずれ死んだら仲嶺門中の墓に入るつもりであり、夭折した息子もこの墓に葬ったという。

〈島門中の場合〉

島門中は字の中で最も大きな門中であり、かつては島門中からも神役が出されていたという。現在は三二世帯で構成されている。門中の墓は約一〇〇年前に建てられたとされている。島門中の成員の中にも、戦後に職を求めて都市部へと移住して行った人が何人かいる。移住者本人が都市部に新しく墓を建て

ることはなく、三二世帯中三一世帯がこの墓を現在でも利用しているという。話者の男性は昭和七（一九三二）年生まれであり、国民学校卒業後すぐに大工として那覇市へ出た。現在は夫婦二人で伊地に戻ってきており、墓は島門中の墓に入るつもりである。

ここで、島門中の三二世帯のうち、門中墓を利用していない世帯の事例を報告する。島門中では、門中の成員は同じ墓を利用するという意識が強く持たれているが、その中で唯一門中墓を離れた家族がある。この家族の戸主であった男性は、戦後に他の成員と同じように職を求めて都市部へと移住して行った。そして亡くなって島門中の墓に帰ってきたのだが、その妻が島門中の墓から家族墓への変更を行った。男性の家は沖繩市にあり、妻は沖繩市の自宅から通いやすい場所に新たに墓を購入し、そこに男性の遺骨の移動を試みた。しかし、門中の墓は、中の遺骨の整理のために、洗骨の遺骨は墓庭で焼骨し、中の火葬の遺骨も一度全部混ぜて墓の奥にまとめていた。そのため、男性の遺骨もその他の遺骨と混ざって区別ができなくなってしまうっており、仕方なく男性の妻は小石を遺骨の代わりとして新しい墓に持っていた。

（3）門中による墓の共有意識

前節では、二つの門中墓の利用状況を説明した。最初の仲嶺門中の場合は、入る人もいれば、移住先に新しく建てる人もいるといような状況であり、移住者の現在の生活状況や故郷へ

の思い入れなどによって、移住者が自由に選択をしている。一方の島門中の場合は、仲嶺門中に比べると、移住して行った世帯でも伊地の門中墓に入ることが多いという特徴がある。現在は一世帯のみが移住先に墓を建てているが、これは移住していった男性の妻が、男性の死後に勝手に建てたものとされている。島門中では移住していった世帯も、門中の成員として同じ墓に入ることが望ましいとされており、同じ村落の中でも仲嶺門中とは異なる。

このような墓の共有意識は、地域によっても差がある。特に本島南部地域は、門中墓の存在感が強い地域である。本島南部の門中では、門中の成員ならば、決められた門中墓を利用すべきという意識が強く持たれている。これについて長嶺操は、糸満から港川へ移住した糸満漁民がどこに墓を持っているかに焦点を当て、移住者が移住から約一八〇年経った現在でも、糸満の門中墓を利用し続け、墓を通して糸満との関係性を保っていることを明らかにした「長嶺 二〇一二」。また、長嶺は「門中墓からは分離しても、門中の縁は切れないと言うが、本稿でみてきたように、門中は墓との関係で維持されているのは明らかである」「長嶺 二〇一二・二九」とも述べており、門中の成員にとって、墓を同じくすることの重要性を指摘している。実際に、筆者が行った調査を行った四八家族の中に、本島南部の門中墓からの離脱者の事例はない。

本島南部の門中ほどではないが、他の地域の門中墓でも、このような意識が持たれている場合がある。前述の島門中は、そ

の意識が強いと言えるであろう。門中墓から離脱した一世帯の事例は、元からの門中の成員である男性と、後に婚姻によって門中の一員になったその妻との間で、門中で墓を共有しなければならぬとする意識に差があったと考えられる。移住者の墓を見る場合、その移住者の故郷の墓はどのように利用されているものなのか、移住先に新しく墓を設置したのは、家族の中の誰なのかということを考える必要がある。それによって、同じ地区からの移住者であっても、前述の二つの門中の事例のように、意味合いが異なり、家族内での故郷に対する思いのズレという一面が明らかになってくると考える。

おわりに

二章での都市部の移住者の墓の事例や、三章での島門中の門中墓からの離脱の事例は、移住者本人ではなく、その妻によって墓が建てられているものである。これらの事例は、移住者の意に反して遺骨の移動が行われ、都市部に新しく墓が増える可能性を示している。移住者にとっては近く感じた故郷も、その家族にとっては馴染みのない遠い土地に感じたことであろう。移住者の家族から聞かれる「墓行事の度に足を運ぶのが面倒」という言葉は、故郷に対する想いの薄さを物語っている。移住者本人にとってのこの距離は、懐かしき故郷や、親戚との団欒を想えば「近い」ものであり、墓行事も年に一、二回だけ訪れれば良いだけのことかもしれない。

しかし、移住者の妻にとっては、夫の親戚と顔を合わせる面

倒な場に足を運ばなければならず、夫の死後も夫の遺骨がそこにある限り、わざわざ通い続けなければならない「遠い」距離である。移住者の家族にとつては、現在暮らしている都市部が故人との思い出の場所であり、馴染みのない「故郷」ではなく、自分たちの近くに墓がある方が何かと都合がいいようである。

また、移住者の故郷の墓が共同墓であった場合、その墓を利用せずに新しい墓を建てること、その共同体との関係を保つ上で好ましくないこともある。実際に、移住後も故郷の墓を利用し続ける人は多く、故郷から遠く離れてもその影響下にあることが窺える。しかし、家族内でその意識が共有されているとは限らないのである。

移住者本人に故郷の墓に入る意志があつても、必ずしも思い通りにはいかない。家族内での故郷や故郷の墓に対する想いのズレは、都市部での墓の新設、遺骨の移動という動きに繋がる可能性があり、これも都市部の移住者の墓増加の一因になっているのである。

註

(1) 「墓の移動」とは、主に墓の継承者の移住により、移住先に新たに墓を建て、以前の墓から遺骨を移すことである。越智は、「墓を移す」という話者の語りから、「移葬」や「改葬」という表現を避け、「墓の移動」という表現を用いるとしている。「越智二〇〇九・六五」。筆者が話を聞いた話者も、同じように「墓を

移す」という語りをしていた。そのため、本稿もこれに倣い、「墓の移動」という表現を用いることとする。

(2) 宗教法人・公益法人によって運営される墓地

(3) 旧暦一月十六日に行われるジュルクニチー(十六日祭)と、新暦の四月の清明節に入ってから行われるシーミー(清明祭)。

参照文献

字伊地編集委員会 二〇一〇 『あしみなな里 伊地』 国頭村字伊地石垣みき子 一九八一 「沖繩本島中部一村落における墓の 変化とその論理」『沖繩民俗研究』三 沖繩民俗研究会

越智 郁乃 二〇〇八

「墓と故郷―現代沖繩における「墓の移動」を通じて―」『アジア社会文化研究』九 アジア社会文化研究会

二〇〇九

「遺骨の移動からみた祖先観―現代沖繩社会における墓の移動に関する一考察―」『沖繩民俗研究』二七 沖繩民俗学会

孝本 貢 二〇〇一

『現代日本における先祖祭祀』御茶の水書房

常見 純一 一九六五

「国頭村安波における門中制度の変遷」『沖繩の社会と宗教』平凡社

名嘉真宜勝 一九七九

「沖繩県の葬送・墓制」『沖繩・奄美の葬送・墓制』明玄書房

長嶺 操 二〇二二

「糸満漁民の分村と墓―八重瀬町字港川の場合―」『沖繩民俗研究』三〇 沖繩民俗学会

早坂 優子 二〇二三

「沖繩県都市部における「霊園型墓地」の受容」『沖繩民俗研究』三二 沖繩民俗学会